
「移動する子どもたち」と日本語教育 — 課題と提言 —

川上郁雄(早稲田大学)
kawakami@waseda.jp

1. 発表の概要

1. 子どもたちをどう考えるか……………「政策の哲学」
 2. 子どもたちの現状と課題は何か…「現状認識」
 3. 必要な政策は何か……………「政策提言」
-

2. 「移動する時代」:「政策の哲学」

- 大量人口移動の時代
- 国境を越える理由の多様化
- 労働、移住、留学、研修、観光、国際結婚など＝大人の理由
- 随伴する家族や子ども
→「移動する子どもたち」

3. 「移動する子どもたち」とは

- ①空間を
 - ②言語間を
 - ③教育的カテゴリー間を
- 「移動する子どもたち」
「移動せざるを得ない子どもたち」

4. 「移動する子どもたち」の特徴

- 幼少期より複数言語環境で成長する。
- 「第二言語としての日本語」(JSL)を学ぶ。



「学び」が分断される可能性がある。
ある。

5. 「学び」が分断される子どもたち

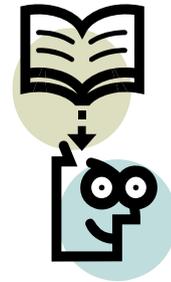
- 日本人、日系の「帰国生」も同じ。
- 「移動する子ども」はグローバル・イシュー
- 「移動する子ども」の教育は受入国の負担
(burden)ではなく
各国共通の責任 (responsibility)

.....「政策の哲学」

6. 子どもたちの課題は何か

現状認識

- 日本語学習
- 教科学習と学力
- 母語保持
- 進学進路
- 心の課題・カウンセリング



7. 学校現場の先生方は

- ・外国人児童生徒をどう指導したらよいかわからない。
- ・子どもの日本語力を把握できない。
- ・戸惑いと負担、疲労感。



**いままでの経験で対応できない
「問題」**

8. 「日本語指導が必要な子どもたち」とは誰か

- 「日本語指導が必要な外国人児童生徒」
(文部科学省)



現場の判断まかせ。学校の先生方の理解が進まない。

「ことばの力」の理解不足。

9. どのような日本語能力が必要か

- ひらがな、カタカナ
 - 漢字
 - 文型、文法
 - ⇒「人とやりとりすることばの力」
 - ⇒「授業に参加できることばの力」
 - ⇒「考えるためのことばの力」
- ・紙のテストでは測れない力

10. 行動から把握する「ことばの力」 JSLバンドスケール」

- 日本語でやりとりする様子から
子どもの日本語習得の段階を考える「ものさし」

例:「黙っている」

「挨拶のことばを使い始める」

「二語文、三語文から自分のことを話し出す」

「長い説明になると、文がブツブツ切れる」

など。

11. JSLバンドスケールの枠組み

年齢集団	4技能	レベル
小学校低学年	聞く	1・2・3・4・5・6・7
	話す	1・2・3・4・5・6・7
	読む	1・2・3・4・5・6・7
	書く	1・2・3・4・5・6・7
小学校中高学年	聞く	1・2・3・4・5・6・7
	話す	1・2・3・4・5・6・7
	読む	1・2・3・4・5・6・7
	書く	1・2・3・4・5・6・7
中学・高校	聞く	1・2・3・4・5・6・7・8
	話す	1・2・3・4・5・6・7・8
	読む	1・2・3・4・5・6・7・8
	書く	1・2・3・4・5・6・7・8

12. 事例検討

小学校

児童・学年	聞く	話す	読む	書く
A 1年	1~2	1~2	1~2	1

日本語指導期間: 1ヶ月

E 1年	3	3	2~3	2~3
F 5年	3	2~3	2~3	2~3

日本語指導期間: 6ヶ月

13. JSL中学生の場合1

生徒	聞く	話す	読む	書く
D 3年	2	2	2	2
G 1年	2~3	2~3	2	2
H 1年	2~3	2~3	2	2
I 2年	1~2	2	2	1~2

日本語指導期間: 6ヶ月

14. 日本語能力の発達に個人差

小学校

児童・学年	聞く	話す	読む	書く
M 2年	3~4	2~3	2	2
L 3年	5	3~4	3~4	2~3
Q 3年	3~4	3~4	3	3

日本語指導期間: 1ヶ月
1年
1年10ヶ月

15. 高校生の場合 ケース1

聞く:7、話す:6、読む:4~5、書く:5

- ・単文を並べる。会話を引用して状況説明する。
- ・複文を使った、論理的な説明は不慣れ。
- ・聞き手に文脈的に依存した会話を多用する。
- ・1歳で来日。家庭内言語がスペイン語。

滞日期間15年

16. 高校生の場合 ケース2

聞く:4、話す:4、読む:3、書く:3

- ・中学2年で来日。滞日期間3年。
 - ・単文や一語文を使用、長い発話がない。
 - ・文字と漢字、意味と結びついていない。
 - ・理解と記述が困難。
 - ・抽象的な内容を扱うことが困難。
-

17. 実際の声を聞いてみましょう。

- 神奈川県立愛川高校
 - 男子生徒と女子生徒
 - 男子:小学校高学年、来日。滞日期間は約5年。
 - 女子:3歳で来日。滞日期間は14年。
 - しかし、授業には十分に参加できない。なぜか。
 - どの生徒も、長期的な支援が必要。
-

18. 再度「日本語指導が必要な子ども」は誰か

- 「日本語指導が必要な外国人児童生徒」(文科省) JSLバンドスケールのレベルの4以下の子どもが数えられている。
- 実際には、それ以上のレベルの子どもが多数いる。しかし、支援がないまま「放置」されている。
- 理由：
日本語能力を把握する「ものさし」(システム)がない。
支援をする人(専門的教員)がいない。
現場やボランティアに依存する対処療法的教育行政

19. 提言

- 年少者日本語教育教員(JSL教員)の確立と養成
- 教育関連法規の改定と「JSL教職科目」の設置
- JSL教員養成の教員養成教育への位置づけ
- JSL教員の新規採用と現任教員のJSL教員化(大学院等での研修を含む)
- 「日本語能力判定方法」の導入→個人カルテ
- 「日本語教育コーディネーター」の配置(鈴鹿モデル)
- JSL教員を配置した「学校」の設立
- 子どもひとりひとりに対する長期的支援体制の確立



『移民の子どもと学力』(2006)

経済協力開発機構(OECD)の
「国際学習到達度調査」(PISA)の結果
から



移民の子どもの学力向上には
言語が重要であることを、改めて強調

『移民の子どもと学力』(2006)

移民の子どもが授業に参加できるような「ことばの力」を育成する**政策を実施している国**の移民の子どもの方が、そのような**政策のない国**の移民の子どもよりも、学力が高い

例：カナダ、オーストラリア

オーストラリアの「移民の子ども」教育

子どもESL教育のテーマ：

移民の子どもの「ことばの力」を把握しそれをもとに授業に参加できる「ことばの力」を育成する授業をデザインし、学校のメインストリームで学べるように子どもを支援していくということ